京都でてこいランド再興プロジェクトについて
—京都でてこいランドを助けたいフィールドワーク—

About revival project of Kyoto Detekoi Land
—My field work to help Kyoto Detekoi Land—

竹　中　一　彦
Kazuhiko TAKENAKA

※　障がいがある人もない人もみんなでてこい

障がいがあるだけでどこにも行けずにこもりきりになっているなんておかしい、障がいがある人もない人も、共に出てきて集える場所を作ろう、と喫茶店経営者であった、今の京都でてこいランド(以下「でてこいランド」と略す）理事長の呼びかけのもと、1994年に京都でてこいランド作ろう会（以下「でてこいランド作ろう会」と略す）が発足、筆者もその働きの趣旨に共鳴して1997年より仲間に加わった。障がいのある人もない人も力を合わせて1999年に施設が完成する、しかしこの年をピークに会員が減少、現在は施設存亡の危機にまで陥っている。

創建当初から障がい児者の社会参加を謳った「でてこいランド」、現在も日本の障がい児者の社会参加は道半ばではないか、との思いから筆者は「でてこいランド」の再興を助けたいとの思いに至る。会員減少の原因をいくつかに分類したうえで、対策を提案、実際に実施し、実施結果や、今後の方向等を論じていきたい。

キーワード：障がい児者の社会参加　みんなで創る　ノーマライゼーション
地域福祉　ボランティア

（平成27年度種智院大学社会福祉学科・卒業生）

※　はじめに

福祉とは…「しあわせ」や「ゆたかさ」を意味する言葉であり、(Wikipedia 1行～3行目抜粋) とあるように[1]、本来福祉とは、人々が幸福に生きるための活動も含めた総称と言える。それならば、福祉のためのアクションは決して一部の専門家に、任せきりにするものでなく、本来、一人ひとりが行動に移していくものではないだろうか。

一市民が現状の福祉の矛盾に気付き、仲間を集めてアクションを起こし、障がいのある人もない人もみんなが社会参加して創った「でてこいランド」が現在存亡の危機に立たされている。構想から22年、建物完成から17年が経過し、その間、行政の法律面もそれなりに整備され、又、あちこちにバリアフリーのレジャー、宿泊施設も出来、障がい児者が出ていける場所が他にも整備されてきたことも直視すべきであろう。「でてこいランド」の役目はもう終わったと、多くの人が思っているのかもしれない。

しかし、冒頭でも述べたが、現代でも日本における障がい児者の社会参加はまだまだ道半ばであると言えないか、それならば「でてこいランド」が果たす役割はまだ終わっていないと言えないだろうか、そして何よりも障がいのある人もない人も一緒になって夢を達成する喜びは一般のレジャー施設ではなかなか得られないのではないのか。

以上の理由から「でてこいランド」がこのままなくなることは、事業を志半ばで断念することを意味すると筆者は思い、そして「でてこいランド」の再興を助けたいとの観点から、分析、対策等を論文にまとめたつもりである。では1章から詳しく述べていきたい。

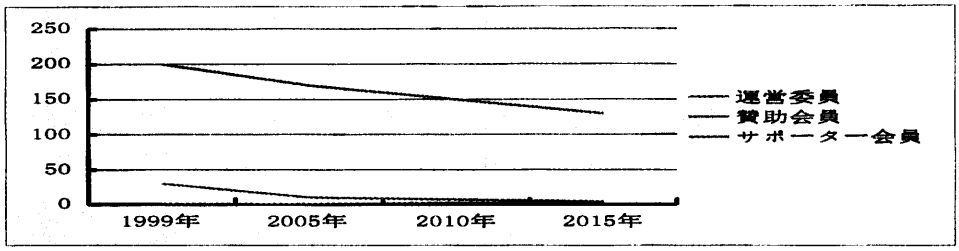
1章　何故、「でてこいランド」は存亡の危機にまでなってしまったのか

(1)　年々少なくなる「でてこいランド」活動、運営の協力者

「でてこいランド」の組織は理事長、理事、そして実際に活動方針を討議して決めていく運営委員、「でてこいランド」の活動に賛同してカンパしてくださる年会費六千円の賛助会員・2010年から新たに導入された会費千円で会員になりやすく設定されたサポーター会員からなり、全てボランティア活動にて運営事業を行なっている。図1で「でてこいランド」創建当時の1999年7月から、2015年12月に至るまで運営委員と賛助・サポーター会員の数の推移を

グラフで表してみた[2]。

図1



※　図2　京都でてこいランド会員数の年度別移り変わり
京都でてこいランド機関紙発送資料より年度別に筆者が計算

このグラフからも、京都でてこいランドが開館した、1999年をピークに年々活動の協力者が減少していっていることが見て取れる。

2010年から開始されたサポーター会員は2015年になっても３名しか集まっていない。

他府県、遠方在住の会員もいるので何か催し物があった時に足を運んでいただいて、手伝ってくださる人は、数えるほどになっている。特に、運営に関して中心的な役割を担っている、運営委員スタッフの減少が激しく、開館当時30名以上いたスタッフは、2015年で、４～５名。運営委員会の集まりが悪い時は２人だけということもある。

(2)　会員減少の考えられる原因を分類する。

では何故、そこまで、会員の数が減っていったのか、考えられる大きな原因を以下の８項目に分けてみた。

① 建物が建ってからの明確な運営ビジョンが示せなかった（やることのマンネリ化）

「でてこいランド」の建物を建てるまでは、建物を建てるというわかりやすい明確な目標があったが、そのあと、明確な運営ビジョンを示せずにいる。

② スタッフ同士の意見や、価値観の対立があった

「でてこいランド」運営の在り方を巡ってスタッフ同士の価値観の違いから感情論に発展し、複数のスタッフが「でてこいランド」を去っていかれた。

③ 地域に根差した施設と、なっていなかった

「でてこいランド」がある地域にも数名の賛助会員や運営委員がおられるも「でてこいランド」の運営方針を決めるための運営委員会は殆ど京都市内で行っている現状がある、「でてこいランド」がある地域の人たちから「ここは何をするところや」と聞かれることもある。

この現状で地域の理解が得られて地域に根ざしているといえるだろうか。

地域の人たちの協力が得られてこそきめ細かい対応が出来るのではないだろうか。

④ 時代の流れ、変化に、柔軟に対応できていない。同時に初心を忘れてしまっている

⑤ スタッフ等の死亡・高齢、病気による退会

⑥ 新しいスタッフになってくれる会員がなかなか入ってこない（効果的なPR不足）

⑦ スタッフがすべてボランティアであるということ

みんなの熱意次第では採算を度外視した力が働くボランティアではあるが、長期間安定した力を発揮するのは難しいのではないだろうか。

⑧ 設備や立地条件等の課題に対応できていない

最寄りの下山駅から健常者の足で15分程度かかる、障がい者の中には１人で行けない人もおられる、送迎車（福祉車両）が無い、運転手もいない、近くに食料雑貨の店がない、障がいのある人は食料品等を持って電車に乗れない人もいる。

(3) 分類から見えてきた事

８つの分類から見てきた事は、22年前の建物建設という大きなベクトルが働いていた「でてこいランド作ろう会」の時代から、建物を建てた後の長期運営計画をしっかりと建てておくことの重要性である。建物を建てるという分かりやすい目標がみんなの心を熱くし、多少の価値観の違いをも飲みこんで力を一つにすることが出来たのであろう。

しかし建物を建てた後の課題等も見えにくくなり、建物がたって、熱が徐々に冷めてくると、もろもろの課題が見えはじめ、それと同時に今後の運営を巡ってみんなの価値観の違いが表に出てきたのではないか。

早い段階で冷静な心でもって長期運営計画をたてることで上に挙げたもろもろの課題に早期に対応出来、対立や問題の芽もあらかじめ摘んでおくこともできたのではないだろうか。

筆者が提案する、運営計画については、次章で、述べ活動の原点については次の(4)で述べていきたい。

(4) 改めて活動の原点は何だったのか

それでは22年前、何が多くの人々の心を動かし「でてこいランド」建設へと駆り立てていったのか、その活動の原点を

a　事業の立ち上げから関わっていた人との会話

b　事業立ち上げ当時の時代背景

の切り口から探ってみたい。

a　「でてこいランド」創建当時から活動に関わった人物との対話から原点を探る　　（立林　己喜男　氏）

筆者の友人であり、「でてこいランド作ろう会」メンバーでもあった、障がい当事者でもある、立林　己喜男　氏（実名・写真も本人承諾・以下立林　氏と略す）に、「でてこいランド作ろう会」が発足した22年前、当時の移動手段や、どのようなきっかけで、「でてこいランド」の活動に参加をしたのか、語っていただいた。

立林　氏は生まれつき四肢に重い障がいがあり、座位もとることが出来ず、現在では、特注電動ストレッチャーのコントロールスイッチをあごで操作して、ヘルパーと、外出もされている。語っていただいた内容をＰ38に示す。

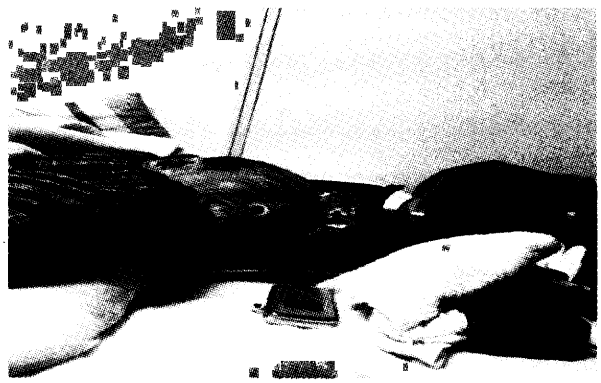
今から22年以上前ですが、私は、介助者だった母親が死んで、自宅で生活するのが無理だったので、ずっと施設の中で生活をしていました。

外出するときは、私は京都のボランティア団体に電話をかけて、ボランティアさんに、来てもらって、ボランティアさんに助けてもらって外出することが多かったですね。

今でこそヘルパー事業所が整備されてきたけど、あのころほとんどなかったから、ボランティアさんに、助けてもらえなかったら、あれだけ外出が出来なかった。

そんな時に京都のボランティア団体から京都に障がいのある人もない人もともに参加して集える場所を作っていこうという話を聞いたので、自分も参加したいと思い、「でてこいランド作ろう会」の会員になりました。

京都には運転のボランティア団体もあったし、そういう人たちに手伝ってもらって、「でてこいランド」の活動に参加することができた、私は、積極的にボランティアさんに連絡をして、（アクションを起こして）来てもらうことが出来たけど、そういうことが苦手だったら、実質施設にこもりきりになっていましたね。



※　立林　己喜男　氏　写真上　本人宅にて2015年２月　筆者が撮影。

（神鳥　基代子でてこいランド理事長）

次に、「でてこいランド」の神鳥　基代子　理事長（実名、写真　本人承諾　以下　神鳥　理事長と略す）にも会ってお話しを伺うことが出来た。

神鳥　理事長が、22年前、何故、京都に障がいのあるひとも、ないひとも共集える施設「でてこいランド」作ろうと呼びかけたのか、会発足当時の様々な状況について、神鳥　理事長か語っていただいた内容を以下に示す。

1990年当時、私は、喫茶店を経営しながら京都のボランティア団体に所属して、さまざまなボランティア活動をしていました。

そんな時、九州長崎の地に、障がいのある人もない人も共に集える施設「長崎でてこいランド」が出来たことを知り、仲間と一緒に現地を訪問、当時、まだ珍しかったバリアフリーの施設に感銘を受け、かねてから、心身に障がいがあるだけでどこにも行けずに閉じこもっているのはおかしいと思っていた私は、京都にもぜひ「でてこいランド」を作りたいとの思いに至り、仲間に呼びかけたことが、京都での「でてこいランド」建設のきかっけです。

あの頃は、あらゆる障がいを持った人たちがでていける場を作ろうという明確な目標がありました。その目標に向かって、スタッフが集まりやすい時間帯にて、それぞれ、三の班に分かれており、一つの班にそれぞれ10名以上のメンバーがいて、みんなで「でてこいランド」建設に向けて熱心に話し合いました。

その結果、「人を集めよう」「資金を集めよう」と、二つのスローガンができあがり、二つのスローガンは、「でてこいランド」建設にむけての車輪の両輪となりました。とにかく、「でてこいランド」立ち上げ時には建物の建設に向けて多くの人が手弁当で活動に参加してくれました。

学生さんや会社員、芸人さんの卵や音楽家、そしてさまざまな障がいを抱えた当事者の人たちやその家族さん、若い人たちもたくさん集まって協力してくれました。

※　神鳥　基代子　理事長　写真上
京都市下京区　「ひと　まち交流館」にて2016年７月　筆者が撮影。

b　「でてこいランド」が作られた前後の時代背景から、原点を探る

国際が障がい児者の社会参加を呼びかけた国際障がい者年1981年から、京都に「でてこいランド」を建設するきっかけになった、長崎でてこいランドの開館、旧建設省（現在の国土交通省）による道の駅の指定、建設、全国への普及、そして国の施策である障がい者差別解消法が施行された今年、2016年に至るまでの、福祉施策と「でてこいランド」等における取り組み等を下の図２に示す[2)]

図２

1981年	国際障がい者年…基本理念（完全参加と平等）
1990年	長崎にて、障がい者の息子を持つ一人の父親が私財を投じ、バリアフリーの宿泊施設、長崎でてこいランドが開館する。
1993年	旧建設省より、全国で103箇所日本最初の道の駅の指定を受ける。
1994年	京都でてこいランド作ろう会発足。（ハートビル・交通バリアフリー法閣議決定）
1997年	京都でてこいランド最寄りの道の駅丹波マーケスオープン。
1999年	京都でてこいランドオープン。
2000年	ハートビル法・交通バリアフリー法　施行。
2005年	障害者自立支援法　施行。
2013年	障害者総合支援法　施行。
2016年	障害者差別解消法　施行。

※　障害者権利条約の批准に伴う国内法整備の取り組みと課題
北野　誠一　氏　論文表紙より抜粋の上筆者が一部付け加える。

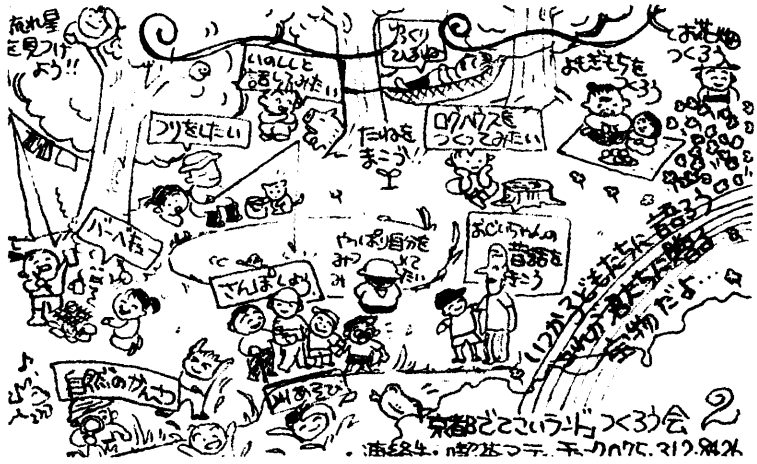
図２を見ると、「でてこいランド作ろう会」が発足した1994年当時は、公共施設等でのバリアフリーを進めていくためのハートビル法が閣議決定された年であり（同法は公共工機関のバリアフリーを進めるための交通バリアフリー法とともに2000年から施工されている）自動車での外出先で車椅子でも施設内の移動ができ、買い物や休憩もできる「道の駅」についても1993年に初めて全国で103箇所が建設省（現の国土交通省）から指定をうけたばかりである。

このような時代背景のなか、自宅や施設に閉じこもっての生活を余儀なくされている障がい児者が多かったことがうかがえる。

(5) 見えてきた原点「みんなで創る」

当時、「でてこいランド作ろう会」には健常者だけではなく、多くの障がい児者の方々も参加して、どのような施設を建てるのか、真剣に議論を重ねていたことを記憶している。ここにきて、「でてこいランド」を作るうえでの原点、「みんなで創る」という言葉が浮かび上がってきた。

後日、神鳥　理事長に、「みんなで創る」事に「でてこいランド」の原点があるのではと、確認の電話を入れたところ、「いいものがある」と一枚の古いテレホンカードを筆者に郵送してくださった。そのコピーを添付するので確認いただきたい。障がいのあるなし、更には世代をも超えて「みんなで創る」といったメッセージがこの一枚のテレホンカードに書かれていると感じたのは筆者だけだろうか。



※　コピー　「でてこいランド作ろう会」オリジナルテレホンカード

２章　「でてこいランド」を助けたい。そのためにどうすればいいのだろうか

※　１章では、「でてこいランド」が存亡の危機にまで陥っている現状から、８つの衰退原因を導き出し、長期を見据えた運営計画を建てることと活動の原点を再確認することの重要性を学んだ。

２章ではこれらの教訓を基に、筆者が取り組んだ活動(フィールドワーク)と結果を紹介しながら「でてこいランド」再興について論じていきたい。

(1)　「でてこいランド」の再興と地域福祉の視点

建物が建てられてから17年が経つ「でてこいランド」であるが、地元の京丹波町の協力者は数名のみで、２年前に「でてこいランド」をPRするために訪問した京丹波町の包括支援センターや社会福祉協議会も、建物があることは知っていたがどのような施設かは知らなかったと言われ、「でてこいランド」がいかに地域に根差た施設になっていなかったか、浮き彫りになった。

「わしらがなんぼ頑張っても京都市内から来る者の出来ることは限られてる、地元の人が中心になって動いてくれへんかったらきめ細かいことは出来ない」これは「でてこいランド」の館長の言葉である。

この言葉の通り、「でてこいランド」を再興していくためには、地域の人たちの協力が不可欠であり、そのためには地域に根ざし、地域の要望に応えていくことが求められていると言える。

(2)　新しいスローガン

これからの「でてこいランド」再興に向けて新たなスローガンを二つ提唱したい。前章でも述べたが、22年前の「でてこいランド作ろう会」の時代には「人を集めよう」「資金を集めよう」がスローガンとなっていた。私は今後「でてこいランド」を立て直していくために、新たに二つのスローガンを提唱したい。

前項(1)で述べた理由から

ａ「地域に根差したでてこいランド」

そして、地域、さらに世の中の特に「でてこいランド」がある地域の抱えている様々な課題をみんなで学び、出来ることを実践していくことは福祉施設たるものの使命ではないかとの考えから

b「学びの場としてのでてこいランド」

二つのスローガンを提唱。この２つのスローガンに沿って筆者が行なった、または行なおうとしているフィールドワークを次に紹介していきたい。

a　地域に根差したでてこいランドを作ろう

(1)　地域との連携とその現状

今から２年前の2014年12月７日（日)、「でてこいランド」の今後のあり方について臨時の協議の場が持たれ、その中で、地元の人たちとの積極的な交流の促進として最低、年に１回は地元で催されるお祭り等の催し物に「でてこいランド」のスタッフが協力していくということが議決された他、「でてこいランド」が地域に根差した施設となっていくために、現在大多数が地元以外の人たちで占められている運営委員を今後は地域の人たちに、なっていただくよう働きかけていく。そのために、今までは主に京都市内で開かれていた運営委員会を、２か月に１回は地元「でてこいランド」で開催し、地域に根差した「でてこいランド」を目指していくことで議決された。

筆者も、「でてこいランド」を学びの場にしていくことを提案した。

しかし、2016年９月現在、「でてこいランド」運営委員の高齢化等による理由から、地元「でてこいランド」での運営委員会の開催が殆どできていない状況にある。

「でてこいランド」がある地域での草むしりや地域の会合等は、主に館長１人が頑張って出席され、何とか地域とのつながりを維持されている状況。

館長が頑張って地域とのつながりを維持してくださっている間に、何とかして地域とのつながりを太いものにしていきたい。同時に「でてこいランド」の会員そのものを、増やしていく工夫も急がれる。

(2)　筆者のフィールドワークから、「高齢者サロン」作りの行き詰まりから得た教訓。

こちらも今から概ね２年前になるが、2015年の１月に京都でてこいランドを立て直すための第一歩として、筆者は京都でてこいランド高齢者サロン作ろう会（仮称）の創設を運営委員会のスタッフに提案をした。

広く大学生等にボランティアスタッフを呼びかけようとした。

活動の報酬を出すことは出来ないが、「でてこいランド」がある地域の人たちにみんなで呼びかけて、高齢者が集えるサロンを運営していくことはボランティアスタッフにとってもソーシャルワークの生きた勉強になり、お金以外で得るものが大きいとのキャッチフレーズで、大学生等を集めることは出来ないかと考えたが、もともと、筆者自身が、地域との人脈が細い状態であることに加え、地域の人たちは地元の公民館等ですでにカラオケを歌ったり、交流をされている。そこををあえて「でてこいランド」に集まってもらうことの難しさ、更に「でてこいランド」にて活動してもらうボランティアメンバーについても、「でてこいランド」がどんなところかといった理解が十分でないままいきなりサロン運営という高度で難解な仕事を行なうことはかなりの無理があったようである。

結局地元の理解者も働き手も集めることも出来ず、発表して数か月で頓挫してしまった。

計画の頓挫から得た教訓であるが、まずは簡単なボランティア活動を通して、ボランティアさんにも「でてこいランド」の、素晴らしさを知っていただき楽しんでいただく、「でてこいランド」のファンを増やしていくことが先決でではなかったか。

そういった教訓からボランティアを、夏祭り、秋祭りの準備を手伝ってくださる内容に変更して、京都のボランティア団体に働きかけ、2015年７月に開催した、夏祭りには高校生５人がボランティアとして参加してくださり、同年10月に開催した秋祭りには大学の学生さんと筆者の仕事先の同僚もボランティアに駆けつけてくれ、ボランティア活動と同時に祭りも一緒に楽しんでいただくことが出来た。

高齢者サロンを「でてこいランド」に作るというビジョンから、計画そのものを柔軟に考え直す必要性を感じて方向転換をした形である。しかし同時に引き続き地域に根差した「でてこいランド」を創っていく事は、「でてこいランド」再興のために必ず必要であると言える。地域に根差すと言うことは、地域の人たちを巻き込んでいくということでもある、それは地域の方々一人ひとりとの信頼を築いていくと同時に、今日に至るまで地域福祉に関わりを、けん引してこられた地元の社会福祉協議会や包括支援センター等と連携の形を探っていくことも大切なことと言えないか、つまりは地域福祉のネットワークに繋がっていくことこそが大きなプラスの転換点にならないか。

そういったことで地域福祉のネットワークにつなげようとした筆者のフィールドワークを次に述べていくこととする。

(3) 筆者のフィールドワークから・地域福祉ネットワークに繋げる。

今年、2016年７月に、筆者は「でてこいランド」の館長と共に「でてこいランド」の地元である、京丹波町社会福祉協議会（以下「社協」と略す）と同じく京波町地域包括支援センター（以下「包括」と略す）を訪問、「社協」の事務局長と「包括」の主任に面会、今後の地域福祉ネットワークに「でてこいランド」がいかに関わっていくが出来るかについて、話し合いの場を持つことが出来た。

京丹波町社協と包括については２年前の2014年にも訪問して、高齢者サロンや認知症あんしんサポーター講座のでてこいランドでの実施について相談にのってもらったことがあり、今回２年ぶり訪問であった。

話し合いの結果、「社協」からは、10月30日に社協が主催する秋祭りに「でてこいランド」も、活動をPRするためのブースを出されて、京丹波町の福祉団体や業者とネットワークとしてつながっていく足がかりにされてはどうか、といった提案をいただく。「包括」からは「厚生労働省」が、認知症を知り地域を作るキャンペーンとしてキャラバンメイトの名で全国展開している認知症あんしんサポーター講座を地元「でてこいランド」で開催していく道が開けたことを教えていただく。

この認知症あんしんサポーター講座のことについては、ｂ学びの場としてのでてこいランドの項にて詳しく述べていきたい。

(4) 地域の課題と「でてこいランド」の課題（地域の人たちとの対話を通して）

2015年２月15日に開催された、「でてこいランド」冬まつりにおいて、「社協」の事務局長が参加してくださり、挨拶で地域の課題を語ってくださった。

あと、2015年９月21日に、「でてこいランド」がある京丹波町下山の地域で数少ない運営委員をしてくださっているM氏、筆者と同じく「でてこいランド」再興計画を考えておられるＮ氏と筆者を交えて「でてこいランド」と、その地域である、京丹波町下山の今後について討論をした。次ページからその内容を示す。

（社協事務局長の挨拶）

事務局長：　ここ京丹波町は過疎による人口減少が激しく、このままいくと、後40年後には、京丹波町という自治体は消滅してしまうといわれています。

何とかして地域の人口減少を食い止めるために、「でてこいランド」を地域の魅力を発信していく拠点に出来ないでしょうか。

たとえば、京都の八坂神社のしめ縄はここ京丹波町で作られています。「でてこいランド」を拠点にして、しめ縄作りを見学に行かれてもいいかもしれない。また、ここは日本海にそそぐ川と太平洋側にそそぐ川との分水嶺になっていて、川から田畑に水を引くことが困難で、先人は苦労をして、山の湧き水を田畑にそそぐための用水路を作った。きれいな湧き水で育てた農作物の味はどこにも負けない自身があります。このような立派な施設が地域で十分に機能していないのはもったいないので、是非有効に活用していただきたいと思います。

※　「社協」事務局長の挨拶…2015年２月「でてこいランド」冬まつりの会場にて

（M氏　N氏　筆者との３者面談）

筆者：　これからでてこいランドが生き残っていくためには、もっと地域に根差したものでなければならない。つまり、地域の人がもっと積極的に活用できること、それから、他所から来た人が地域の人たちとの交流の場や、地域福祉のネットワークの中で「でてこいランド」の役目を明確にしていく、てこいランド以外で地域の色々な観光資源と橋渡しができるような場所にもなっていかなければならないと思う。

N氏：　「でてこいランドも」いろいろなことが出来る可能性はあるが、現時点では働き手の不足が顕著にあり、少なくとも今すぐに、「でてこいランド」でさまざまな事業を展開していくことは困難だ。しかし、「でてこいランド」周辺は、体験型の農園や牧場、洞窟等、また歴史ある寺社仏閣もたくさんある。

つまり、「でてこいランド」をこのような観光資源（地域福祉的な見方をするとこれらは社会資源ともいえる）をめぐる拠点にして行くことは出来ないか。

筆者：　自立支援ボランティアといって、うつ病等様々な原因で、仕事に行けず、自宅にこもりきりになっている人たちに対して、まずは草むしり等のボランティアに参加していただき、社会との接触、働く意識を取り戻していくという取り組みがある。でてこいランドの周辺も過疎が顕著に進んでおり、草むしり等の人手が慢性的に不足してると聞く。

このようなボランティアを受け入れることにより、定期的な草むしりが出来、「でてこいランド」がある、地域においても良い意味で刺激になることは出来ないだろうか。

M氏：　ここいらへんの地域も、過疎が顕著に進行してきており、人口が少ない分、一人の人間に、いろいろな役が回ってきて、仕事以外に自治会に行ったり、消防団に行ったり草むしり等も定期的にしなければならないし、本当になかなか自分の時間が持てない。若い人たちは都会に出てしまって帰ってこない人が多い、すると余計に人手が足りなくなるといった悪循環が続いており、このままでは立ち行かなくなってしまう。また、田舎も以前と比べると徐々に人間関係が希薄になってきている、過疎を食い止めていくためにも、一人ひとりの負担を減らしていくことを考えなければならない、そのためには今までと違った、思い切ったことも検討していかなければならないと思う。

しかし、地域の長老はなかなかそのような考えが理解できず、いままでのやり方にこだわっておられ、なぜ、昔のようにできないんだ、と言われる時がある。

※　M氏・N氏・筆者の三者会談…2015年９月21日「でてこいランド」にて

(5)　「でてこいランド」と地域…互いの課題の共通点

「でてこいランド」のある、地域の課題は、そのまま「でてこいランド」の組織の課題と驚くほど重なっている事に気付いた。

「でてこいランド」も、ボランティアや会員の数が減少ており、「でてこいランド」管理当番等の役は同じ人が何度もされることが多い。

また、今まで、革新的なアイデアを提唱された、会員は今までのやり方にこだわる主に設立当初から「でてこいランド」建設・運営の功労者的な立場の会員さんの反対にあって、結果「でてこいランド」会員を辞めておられる。

ここに、「でてこいランド」と地域、お互いの課題の共通点をを分かち合い協力していく足がかりをつかむことが出来ないだろうか。
「でてこいランド」再興は地域の再興とも足並みをそろえる必要があるのではないだろうか。

b　学びの場としての「でてこいランド」を作ろう。

実は、この学びの場としての「でてこいランド」のスローガンを他の運営委員に紹介したときに、「何故、でてこいランドで学ぶの」と聞かれた。筆者は前のこのスローガンの紹介の所で述べたように地域の課題を共に学んでいく必要性を述べたが、実はもう一つ重要な意味があることに後になって気付いた。

それは、マネジメントの大家で知られるピーターFドラッカーの「すべての成功は陳腐化する」[4)]という言葉がヒントとなった。

22年前の「でてこいランド作ろう会」の時代は多くの人たちが手弁当で協力してくれた。建物が建ってからもこのまま手弁当で協力し続けてくれるといった意識が運営委員の一人ひとりになかっただろうか、特に「でてこいランド」建設の中心となって労苦をいとわなかった「功労者」と言われる人たちに、そういった意識が強かったのではないだろうか、少なくとも筆者の知る限りでは、運営委員同士の価値観の対立は、特に柔軟な考えを持った人たちと「功労者」との対立と言う形で多く現れていた。

「成功」が時には変革の足かせになってしまう、「でてこいランド作ろう会」の時代に潜在化していた課題を、その時代のうちに顕在化出来なかった、成功の負の側面を学べなかった。これは大きな教訓ではないだろうか。

学ぶことは冷静な心を養う。複数の視点、長期の視点と短期の視点、そして潜在化している問題を顕在化するには、学ぶことなしにして出来ないと筆者は考える。

こういった教訓を無にしないためにも「でてこいらんど」を学びの場にしていきたいとの発想に至った。

(1) 認知症あんしんサポーター養成講座の開催（今までの実績と今後の展開）

前項でも述べたが、認知症あんしんサポーター養成講座とは、認知症になっても住み慣れた地域で多くの人たちが安心して暮らしていくことが出来るよう、認知症の人たちの理解者・応援者として認知症の人たちに適切な対応をしていくことを目指していく「厚生労働省」が認知症サポーターキャラバンの名のもと、全国展開している運動である。

※ 認知症サポーターキャラバンの、シンボルマーク[5)]

旗（京丹波町包括にて筆者撮影）

筆者は、以前、認知症安心サポートリーダーの資格を取得しているため、講師として、認知症安心サポーター講座を開催することが出来るので、こういった資格を生かし2015年の始めに、学びの場としての「でてこいランド」を作っていくための、第一歩として、「でてこいランド」を主催として認知症安心サポーター講座を開催していくことを目標とした。初回から「でてこいランド」の本館で、講座を開催する予定であったが、当初諸時事があり京丹波町での開催が困難であったため、初回と２回目は京都市内での開催となった。認知症安心サポーター講座に関しては、初回は2015年２月（ひとまち交流館）２回目は同年５月（種智院大学）にて、「京都でてこいランド主催、認知症安心サポーター講座」と題して講義を行い、認知症の方に対する正しい理解と対応を伝え、同時に「でてこいランド」をＰＲすることもできた。

参加者は「でてこいランド」の関係者、種智院大学の学生、先生、職場、友人等に集まっていただくことが出来た。

※ 「でてこいランド」主催、認知症 あんしんサポーター講座。種智院大学で講義をする筆者。

筆者は京都市内で認知症安心サポートリーダーの資格を取ったが、今年2016年でてこいランドの館長が、京丹波町にて認知症サポートリーダーの資格を取得。

このことにより、京丹波町にて「でてこいランド」の主催のもと認知症サポーター講座を行うことが出来ることを、今年の京丹波町包括支援センターを訪問して確認した。

このことを確認して、第3回京都でてこいランド主催認知症安心サポーター講座は今年の11月3日（文化の日）いよいよ「でてこいランド」での開催となり、「でてこいランド」がある地域の人たちに案内のビラを配った。

(2) 「でてこいランド」を学びの館に

「でてこいランド」を今後、学びの場としていくために、筆者は二つの提案をしたい。

① 知症あんしんサポーター講座の開催をファーストステップとするとともに、地域の高齢者福祉事業を回って、京都でてこいランドの本館を、高齢者介護に携わる、職員の介護研修の場や、さまざまな福祉の研修ができる場として、整えることを提案していきたい。（今年開催される社協主催の秋祭りにも参加することで「でてこいランド」と地域の事業所との交流の接点にしたい）

② 地域の魅力、情報を発信していく「でてこいランド」として、地域のさまざまな、観光、社会資源を学べる「でてこいランド」を提案したい。

2015年2月の社協事務局等の挨拶や同年9月に行った3者面談の中でのN氏の話の中からも分かるように、「でてこいランド」周辺の京丹波町は歴史ある寺社仏閣や、さまざまな観光資源があることが分かった。

何の情報もなく、ブラッっと旅に出るのもいいが、様々な情報を学んだ上で改めて観光をすることで、「この田んぼの用水路は山の湧き水から引かれているんだ」「ここで京都の八坂神社のしめ縄を作っているんだ」等、思いをはせることが出来、より地域の魅力を感じることが出来るのではないだろうか。

(3) プロジェクト遂行のスキルを磨け…プロジェクト遂行の難しさ。

筆者が、「でてこいランド」の再興を助けたいと心に決め、実際に現場にて再興のための計画をし、数々のフィールドワークつまりプロジェクトを実行したことにより、気づいたことは、計画をしたことと違い、予想外のことが次々と起こることである。

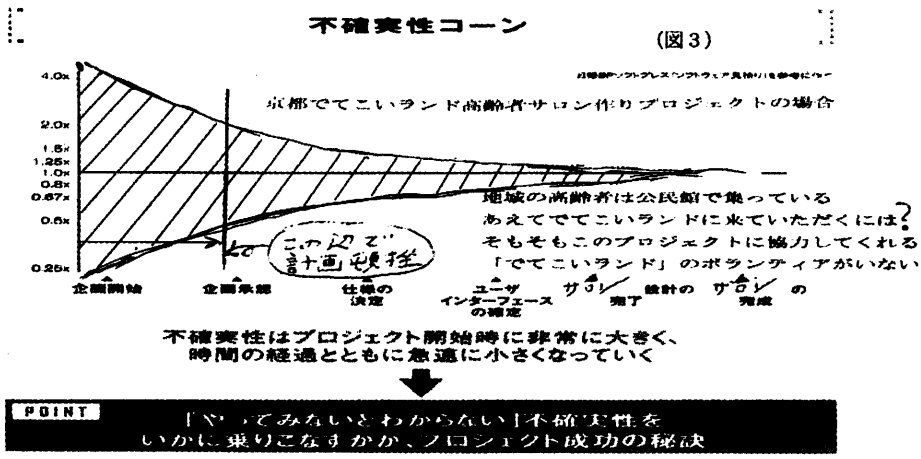
今回の再興プロジェクトを進めていくにあたって、筆者が参考とした、『図解とまんがでわかるプロジェクトを成功させる技術』の中に、プロジェクトを進めていくことが何故難しいかについて下記の文章が書かれていたので下記に抜粋した。

「プロジェクトの難しさは、独自性と有期性から来ています。言い換えればやってみないとわからないということです。やったことをないことをするんですから、何が起こるかわかりません。そのうえ期限を切られてしまうと、その期限を守れるかどうかも、わからないというわけです」[6)]

※ 「」内、芝本秀徳『図解とまんがでわかるプロジェクトを成功させる技術』Discover P16 6～12行 抜粋

※ 不確実性を小さくして困難を乗り越える。

下の（図3）を参照いただきたい「不確実性」コーンと言われるグラフである。[7)]



※ 図3 芝本秀徳『図解とまんがでわかるプロジェクトを成功させる技術』Discover p17より抜粋

この不確実性コーンは、２年前に筆者が行おうとした高齢者サロンのプロジェクトがどこの時点でうまくいかなかったかを示した。

不確実性とは「やってみないとわからない」ことであり、プロジェクトを開始した時には不確実性は大きく、一つ一つ課題をクリアーしていく度に、この不確実性は小さくなっていく。プロジェクト成功の鍵はまさに一つ一つ課題をクリアーして、いかに不確実性を小さくしていくかにかかっている。今、「でてこいランド」を立て直すための取り組みはすべて、不確実性の高い状態であるといえる。一つ一つ課題に取り組んでいくことで少しづつこの不確実性を小さくしていきたい。

(4) 出来ることから一歩ずつ…短期目標を立てる。

プロジェクトの遂行がいかに難しく、予想外の出来事が起きたり見込みが違っていたりして当初予想していた通りになかなかいかないことが、フィールドワークにて身をもって知ることが出来た。

しかし、やってみなければわからないということは、やってみればわかると言うことである。たとえ計画が頓挫してしまってもそこから学ぶことはたくさんある。

筆者が提唱した「地域に根差したでてこいランド」と「学びの場としてのでてこいランド」はいわば大目標である。

大きな目標に近づいていくためには、段階的に小さな目標が必要であろう。今年１年、活動した中から、学んだり、筆者自身が手ごたえを感じたものの中から当面の目小標を４つ下記にまとめてみた。

① ボランティアの募集。

第２節でも詳しく述べたが、まずはボランティア団体の掲示板等に書き込み、広くボランティアを募集していきたい。

② プレゼンテーションの継続。

認知症安心サポーター講座を「でてこいランド」主催で今後も継続して行っていき、「でてこいランド」のことも同時にPRしていきたい。

③　知的障がい児者施設に対してキャンプ等の行事に使用していただく。

地域の高齢者サロンは今回達成することが出来なかった。このことは、まずは誰が利用することに焦点を絞るのかという、卒論演習の明石　隆行　先生の指摘に対して、答えを出せていない状態である、その答えの一つとして、まずは多くの知的障がい児者の人に使っていただけないか模索していきたい。

すぐには地域に根差した施設にはならないかもしれないが、この１年間筆者が「でてこいランド」にてフィールドワークを行った上で、当初の計画にはなかったが新たな活路として、見つかったものである。

④　論文の公開

この論文を雑誌、インターネット、SNS等で、公開して、広く共感者を得ていくことを検討していきたい。

(5)　将来にむかって…ボランティア活動の強味と限界。プロの視点の必要性。

「でてこいランド」の創建時から、現在の運営に至るまで、スタッフは、すべてボランティアである。ここでボランティアについて、簡単におさらいしたい。

ボランティアとは、自ら進んでする人の意。教育、文化、まちづくり等の分野で自発性、無償性、奉仕性を原則に、ともに活動しようという人々の総称[8)]

※『ブリタニカ国際大百科事典』１行目～５行目

http://kotobannk.jp/word/より抜粋

上記にあるように、人々の自発的な意志が、ボランティアの原動力である。ボランティアは、時に人々が大きな共通の目標に一丸となった場合、非常に大きな力を発揮する。22年前の「でてこいランド作ろう会」の時代がまさにそうであった。大きな分かりやすい目標のもと、多くの方が一つになったので「でてこいランド」本館を建設することができたと私は考える。

しかし長期の運営となると、心の熱い時も、冷めてしまっているときも、一定の力を発揮し、先を見据えた視点で、計画を立てていかなければならない。これはプロとしての意識であり視点ではないだろうか。

今後も長期にわたって、でてこいランドを運営していくためには、筆者は

プロの働き手が必要であると考えている。

今の筆者に出来ることは、失礼な言い方かもしれないが、マンネリ化してしまったでてこいランドの取り組みに、新しい風を吹かせることであり、一種のカンフル剤の域を出ないものかもしれない。

最終的にはプロの意識を持った働き手も含めてあらゆる立場の人たちと一緒に運営していくことができないものだろうか、それが出来るかどうかは、今の時点ではわからないし、今後の大きな課題であるといえる。

※　おわりに

今回の論文では、何故、「でてこいランド」が存亡の危機にまで陥ったのか、複数の角度から見つめ直した上で、新しいスローガンを提案してフィールドワーク（プロジェクト）を実践していったつもりである。多くの人たちの心を熱くして協力しあった「でてこいランド」の建物建設という、分かりやすい目標に比べれば、地味なイメージが拭えない長期を見据えた運営計画、しかも一時の熱い心だけではむしろ人々の価値観の違いによるトラブルのもとにさえなり感情論の対立から複数の会員が辞めていったことは１章で書いた通りである。

モティベーションの原点は大切にしながらも、時代や価値観の変化を汲んで、一つの成功の形にとらわれることなく、柔軟にやり方を変えていくことの必要性も述べてきたつもりである。2015年の１年にわたるフィールドワークで、地元京丹波町の「包括」と「社協」とのつながりを持つことが出来、さまざまな協力もいただくこともできた。このことは「でてこいランド」が地域に根ざした施設となっていくための第一歩であると考えている。

今後、「包括」と「社協」には運営員会の議事録やでてこいランドの機関紙を送る等、つながりを切らないようにしながら、あらゆる連携の可能性を探っていきたいと思う。

大学生や高校生、広く一般のボランティア参加の声掛けをしていきたいが現時点ではどれだけの人からの賛同を得られるのか、未知数である。

最終的には、プロ意識の育成も必要であるが今の閉塞した事態を打開するめの、起爆剤的は働きが当面の間必要と考える。

今回のフィールドワークにてプロジェクト遂行の難しさを身をもって学ぶと同時に失敗も学びの題材として、プロジェクト遂行のスキルアップを図っていく必要性を感じた。

プロジェクトを実行に移すことで予想外のことが起こるが、同時に予想外の可能性も見つかることも学んだ。このことは、机の上の学びと実践を通した学びは車輪の両輪であることも物語っていないだろうか。

障がいのある人も、ない人もみんなでてこい」という理念のもと、京都でてこいランドは建設された、つまこれは共生と障がい児者の社会参加の理念である。今、私はこの理念を大切にしながらも、「あらゆる立場や身分の人が集まって交流できる場」としてのでてこいランドが、最終的にそういったところまで到達できないだろうか、と考えている。

つまり「障がいのある人も、ない人も、子供も、老人も、学生も、フリーターも、政治家も、心を病んで引きこもっている人も、希望を持っている人も、失望している人も」みんなでてきて、立場を超えて集える場所。

遠い先になるかもしれないが「でてこいランドが」そういった場になってほしいと思う。それは、我々の世代では到達出来ないであろう。世代を超えて、事業をバトンタッチしていく仕組みが必要となってくる。

今回の論文は、そのための最初の一歩を書いたにすぎないと思っている。

注

(1) 福祉の定義について、『Wikipedia』福祉１行～３行より抜粋ja.mwikipedia.org/wiki/を2016年９月10日検索の上、福祉の活動は本来市民一人ひとりが幸せになるために行動していくことではないか、と筆者は考え、「でてこいランド」建設のきっかけと結びつけた。

(2) 図１について、筆者は「でてこいランド」の会員向けに機関誌の発送を担当しており、年代をさかのぼって、機関誌を送った過去の名簿を確認しておくことで、会員数の移り変わりをグラフにした。

(3) 北野　誠一　論文　障害者権利条約の批准に伴う国内法整備の取り組みと課題』より表紙の図１『我が国の障害者政策の展開（北野オリジナル)』を抜粋の上、筆者が「でてこいランド」建設に関わる経緯と道の駅の整備について付け足す。

(4) 成功は常に、その成功をもたらした行動を陳腐化する。新しい現実をつくりだす。新しい問題をつくりだす。PFドラッカー『マネジメント』P49より抜粋。
このドラッカーの言葉、筆者は事業の継続のためには、ひとつの成功にとらわれることなく、柔軟に学び続けていく必要性を痛感し、学びの場としてのでてこい

ランドを提案した。

(5) 認知症サポーターキャラバンのキャラクター『認知症サポーターキャラバン』のHP　www.caravanmate.com/ 2016年９月15日検索より筆者がコピー。

(6) 芝本秀徳『図解とまんがでわかるプロジェクトを成功させる技術』Discover p16　6～12行の文章を抜粋

(7) 芝本秀徳『図解とまんがでわかるプロジェクトを成功させる技術』Discover p17にあった不確実性コーンの図を抜粋した上で、筆者が行ったプロジェクトがどこで頓挫したのか表に付け足してみた。

(8) ボランティアの定義について『ブリタニカ国際大百科事典』１行目～５行目 http://kotobannk.jp/word/より抜粋そのうえで筆者の持論を展開した。

参考資料

(1) 「でてこいランド作ろう会」『京・でてこいだより36号』1997年２月21日発行

(2) 「でてこいらんど」『運営委員会議事録』2015年10月18日

(4) 『高齢者サロン等の居場所づくり―栃木県』
www.pref.tochigi.lgjp/e03/wclfare/isykourisha//jire　2015年１月10日検索

(5) 『京丹波町社会福祉協議会ホームページ』www.kyoshakyo.or.jp/kyotanba/ 2015年11月26日検索

(6) 『ブリタニカ国際大百科事典』http://kotobannk.jp/word/　2015年１月10日検索

(7) 『京丹波町　認知症ケアパス』2014年11月7日　京丹波町包括支援センターにて頂く

(8) プロジェクトの特徴・不確実性コーン　芝本秀徳著『プロジェクトを成功させる技術』

(9) 明石　隆行　先生　担当授業　地域福祉論より
『12月９日配布資料　コミニュティーワーク』

(10) 北野　誠一　氏　論文『障害者権利条約の批准に伴う国内法整備の取り組みと課題』

(11) 「でてこいランド」運営委員Ｎ氏　作成『京都でてこいランド周辺のお出かけスポット』2015年12月６日　Ｎ氏本人より直接いただく

参考図書

(1) ＰＦドラッカー著『マネジメント』ダイヤモンド社

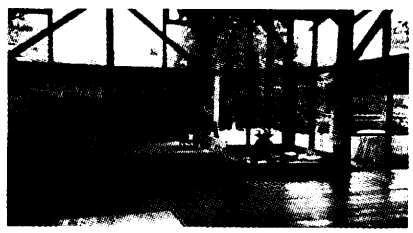
(2) 芝本秀徳　著『プロジェクトを成功させる技術』ディスカバー

(3) 牧里　毎治・野口定久　編著　『協働と参加の地域福祉・福祉コミュニティーの形成に向けて』ミネルヴァ書房

(4) 丸屋　真也　著　『ライフスキルで人生を変える』いのちのことば社

(6) 社会福祉士養成講座編集委員会　編集　『福祉行財政と福祉計画』第３版　中央法規

※　京都でてこいランド外観



※　京都でてこいランド内部